

2021年8月15日 聖餐式説教

私たち聖公会礼拝の中心は聖餐式です。本日さきほど読まれた福音書にもありましたように、聖餐式は主イエスの体を食べ、その血を飲み、罪ある私たちの体と魂はキリストのからだと血によって清められるのです。キリストの体を食べその血を飲むとは、私たちの体の中に主イエスの命を宿らせることであり、キリストが私たちのなかで具体的に働くということでもあります。これは私たちが生きていくために不可欠な存在であるのです。

さて、本日はこの聖餐式についておさらいをしながら「聖なるドラマ」とも言われ聖餐式の意味を確認したいと思います。

聖餐式を定められたのは、主イエス・キリストです。主イエスは十字架につけられる前の日、弟子たちとともに最後の食事をなさいました。いわゆる最後の晩餐と言われているものです。コリントの信徒への手紙一には、「主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました」と書かれています。このように聖餐式は主イエスが最後の晩餐の中で定められた礼拝であります。そして聖餐式は、主イエスと弟子たちが共にした最後の晩餐に、場所と時間を超えて私たちも共にするという事なのです。聖餐式の司式者は主イエスであり、司祭は主イエスの役割をこの世的に表しているに過ぎないのであり、司祭が本当の聖餐式の司式者ではありません。

また聖餐式は、天国が完全に来的时候、すなわち悪と死が滅ぼされてすべてが主なる神の御心のままになされるその時の祝いでもあります。すなわち聖餐式は来るべき喜びの日の先取りでもあるのです。

さて聖餐式は最近大きく変化いたしました。その最も象徴的なのは祭壇の位置であります。当教会でも昨年まで行われておりましたように、祭壇は至聖所と呼ばれる礼拝堂の一番奥にあり、司祭も会衆も祭壇に向かって礼拝をしておりました。これは主イエスの体と血を表すパンとぶどう酒が尊いものであることを強調する意味でありました。ところが今から百年と少し前、ディダケと呼

ばれる文章が発見されました。これは一世紀頃書かれた文章で、主イエスが天にお帰りになられた直後の教会の様子が記されておりました。この中には当時の礼拝についても触れられております。それによりますと聖餐式は皆が同じ方向を向いて礼拝をささげるのではなくテーブルを囲む形でなされていたこと、最初に聖書（旧約聖書）が読まれてそれに対する説教がなされ、そして共にパンを割き礼拝をしていたということです。現在では司祭が会衆の方を向いて礼拝を行うようになったり旧約聖書の朗読がなされるようになったりしたのは、このディダケの影響によるのです。初代教会の姿の回復が、昨今の礼拝改革の基本になっているのです。

このように聖餐式は前半が聖書朗読と説教、代祷の「御言葉の祭り」、平和の挨拶以後が「聖餐」という二部構成になっており、それぞれ重要なものとして位置づけられています。救いを得るのに誰でも必要な sacrament（聖奠 これは神様の恵みをこの世の存在を用いて具体的に表す方法）は洗礼と聖餐であります。日常生活の中で聖餐は最も重要な存在として、初代教会から重んじられ、主イエスが再び来るまで常にこれを行えとの命令に、私たちの教会は忠実に従っているのです。ちなみにこの sacrament は全部で7つ、洗礼、聖餐の二大 sacrament の他、信徒按手式、聖婚式、個人懺悔、塗油の式、聖職按手式があります。

主イエスの体を血をいただき、私たちの中で受肉させる、これは、私たち人間が生きていくのに様々な植物や動物の命を取り入れて生きているのと同様に、主イエスの命を私たちの中に取り入れてこの世の信仰生活を過ごしていくことが教えられています。今日本は飽食の時代と言われ、自分が生きるために他の命を取り入れていることがすっかり忘れられています。私たちはそれを改めて思い起こすと共に、主イエスの体と血を軽んじることなく、聖餐式の度に主の救いの業を思い起こしていきたいものであります。